

# 被災女性が動物マスコット作り

〈宮城〉東日本大震災で被災した南三陸町の仮設住宅に住む女性たちの手づくりの動物のマスコット付きキーホルダー「ミナ・タン チャーム」が注目を集めている。マスコットづくりは3年前にスタートし、現在までに11種類を制作。毎年、干支にちなんだ動物も作っており、今も来年の干支である「酉」のマスコットの制作が進んでいる。

## 「酉」の制作進む

マスコットはファッションデザイナーの芦田多恵さん(52)がデザイン。芦田さんは年2回ほど、父の芦田淳さんが興したブランド「ジュン アシタ」のスタッフとともに南三陸町を訪れ、新商品の裁縫技術を指導。女性たちはおのおの自宅で作りに励む。

芦田さんのブランドの服づくりで余ったイタリア製の高級布などを使ったチャームは1個1万2千〜1万8千円。キリンやネコのほか、ウマ、ヒツジ、サルなど干支の動物もモチーフとしている。品質の高さが人気を呼び、これまでに4500個以上が売れた。

町内の女性十数人が制作に携わり、販売しい検品をクリアした商品を販売。売り上げから販売経費を差し引いた全額が女性たちの報酬となる。

マスコットづくりが始まったのは平成25年。長く継続できる復興支援を行いたいと考えていた芦田さんが、町内で活動するボランティア団体などの紹介でプロジェクトを立ち上げた。

芦田さんは「被災地の状況が変わっていく中で、仮設住宅の方々に技術など後に残るものがあればと考えた」と振り返り、「会うたびに笑顔になってくれ

# 「とても充実」あふれる笑顔



酉年にちなんだカラフルなトリのマスコットをデザインする芦田多恵さん(右)と、マスコットを制作する仮設住宅の女性ら  
＝6日、南三陸町(上田直輝撮影)

てうれしい。物づくりが生きがいとなり、自立支援につながると話す。

## 「起きるのが楽しみ」

6日には南三陸町の「南三陸ホテル観洋」で制作会を実施。芦田さんとスタッフが地元約40〜80代の女性約10人と歓談しながら、新商品の作り方や裁縫技術を指導。6月に作り始めた酉のマスコットのほか、クマやサルを制作した。

最年長の沼倉京子さん(89)は「震災で大変な日が続いたが、作り始めてからは朝起きるのが楽しみになった」と笑顔を見せる。沼倉さんは酉年生まれで「自分の干支が巡ってくるのを楽しみにしていた。一羽一羽、かわいく作ってやりたい」と話した。

南三陸町の仮設住宅に住む梅沢松子さん(66)は「ブランド品なので、商品に問題がないよう一つ一つ丁寧に仕上げている」といふ。「友人たちと集まり、知恵を出し合っている時間がとても充実している。この先も続けたい」と力を込める。

マスコットは芦田さんのブランド「タエ アシタ」の直営店や東京都内の百貨店、南三陸ホテル観洋で販売するほか、ネットからも購入できる。